

国内仕様のTMAXをベースにしたコンプリート新車が「TMAX-R」(107万1000円／車検対応)。『ヒットマン』マフラーを装着しただけのように見えるが、駆動系などにRC甲子園ならではのチューニングが施されており、輸出仕様を上回るレスポンスと加速力を誇る。それでいて扱いやすいのも魅力だ。同車はYSP甲子園(☎0798-22-1102)、YSP大阪箕面(☎072-726-5310)、YSP豊橋南(☎0532-48-3336)、YSP浜松(☎053-465-4545)、YSP川崎中央(☎044-755-1141)、YSP成増(☎03-3977-5025)の6店のみで販売中。TMAX-Rの価値を理解し、アフターサービスも万全のお店ばかりだ。



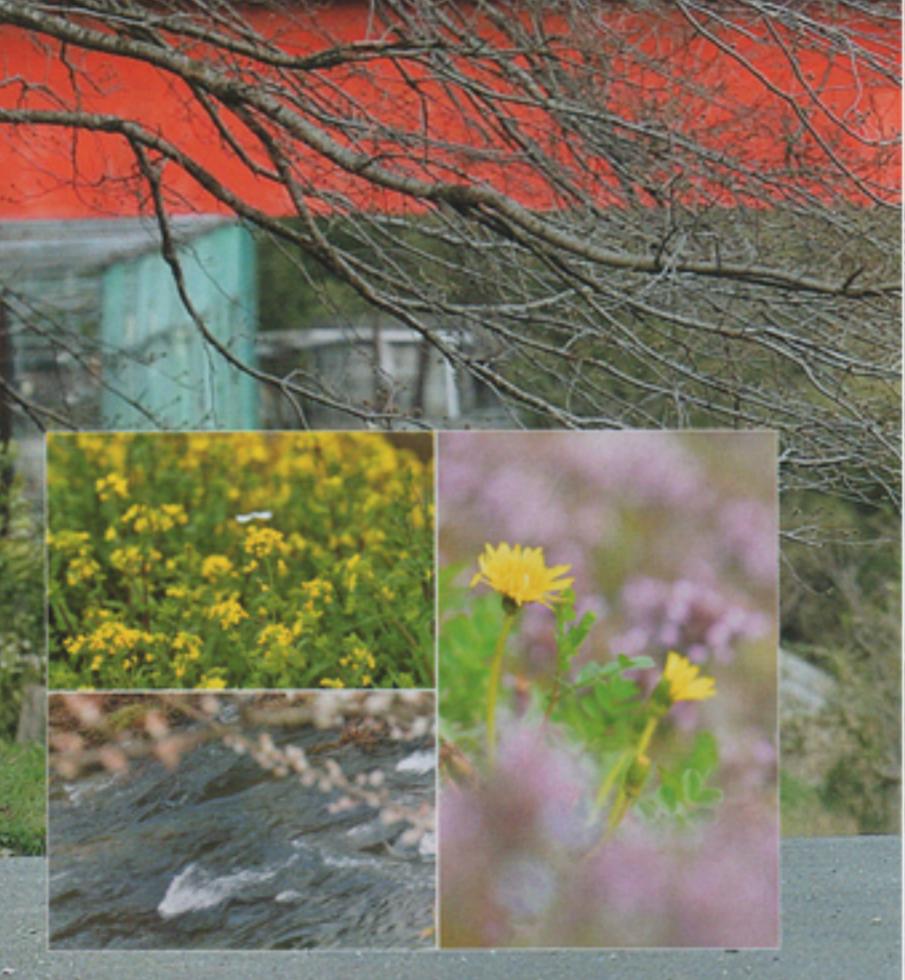
キャタライザ部分は2重構造。この上にリヤブレーキ・マスターシリンダーがあるため、万が一にもペバーロック現象を起こさないように……という配慮からだ。おかげで足を温いたときにもまったく熱さを感じない。

ジョイントスプリングは折れにくく共振もしにくいフリーハーフタイプ。サイレンサーは軽量で耐久性に優れるタンク製。マフラー全体の立て付けがしっかりとしていて、信頼感も高い。



TMAX-R ウエアリング考

TMAX-Rをファーストバイクとするなら、ジャケットにこだわったい。上質なものを身に付けるだけで、端から見たときにずっと高級感が増すからだ。今回選んだのは、レーザー換装プリントで新たなデザイン性を表現した「ベリック『LASER』ジャケット」(6万1950円)。肩と脇がパンチングレザーだが着脱式インナーガードが付属するため、ほぼオールシーズン着られる。



RC KOSHIN TMAX-Rは カフェレーサー

Tmax-R is Cafe Racer

文—梶 浩之

撮影—鶴見 健

[前編]

RC甲子園がプロデュースした
コンプリート新車が
『TMAX-R』。

初代TMAXと5万km近く
付き合ってきた本誌・梶が、

ツーリングを通して
“その真価”を浮き彫りにする。



RC甲子園の魔法

ただし、僕が本当にオススメしたいのはRC甲子園がプロデュースしたコンプリート新車「TMAX-R」のほうだ。

操る楽しみ。求めるなら、もうこれ以外の選択は考えられない。

同社が手掛けた先代TMAXベースの「R」も面白かったが、現行ベースはもつといい。特に右手と後輪のシンクロ感に脱帽だ。ノーマルの現行TMAXと過ごしたときに感じたささやかな不満(?)はもうない。スロットルを開けるときも、閉じるときも——まるで魔法をかけられたような出力特性。どうやつたら、ここまで意のままになるのだろうか?

日本を代表するレーシングコンストラクター・RC甲子園のノウハウは、単なるパワーアップではなく、そのパワーを「ライダー」がいかに引き出しやすいかに注がれているのだ。こそ、最新技術のフィードバックだろう。「速い、意のまま、気持ちいい!」のまさに3拍子が揃っている。

スタイルも気に入った。テールバー、コーンエンジンのチタン製サイレンサーが美しいだけでなく、全体的な雰囲気が4輪車でいうところのAMGやアルピナを思い出させるからだ。上品なヤンチャ——とでも言えばいいだろうか? ちやらちゃんと乗るよりも、しつかりした身なりと「ライディングテクニック」で、正面から向き合いたい。そんな印象を受けた。

逆に、上質なジャケットとヘルメットを身に付けていれば、十分に主役を張れるマシンもある。僕ならウエア類を2セット用意して、普段はカジュアルに、週末はカフェレーサー的に遊ぶといつも思つた。早起きして、サクッとスポーツライディングを楽しんでぐる。午後は家族サービスに時間割く。そんな「日常」と「非日常」の両方を満足させてくれる懐の深さが、このマシンにはある。

ときには子供や妻とタンデムで出かけるのもいいだろう。シフトショックがなく、ビリオンシートが幅広いおかげで、後席の安心感&快適性もピカイチだ。お土産の収納にも困らない。排気音が適度に抑えられているため、余計な気遣いが不要なのもうれしい。まさしく縦横無尽に楽しめるバイク、ライダーに何も規制しない「自由な翼」がTMAX-Rである。

縦横無尽の活躍

バイクに乗り始めて27年、30台以上を乗り継いできた筆者が、最も長い距離を供にしたのがTMAX(初代・逆輸入車)だった。通勤から日帰りツーリング、菅生や鎌鹿への取材的足として、それはもう縦横無尽に活躍してくれたのである。

僕にとってTMAXはスクーターという意識はない。オートマチック・スティップボーツと謳われるよつに、峠道で「ブイブイ」わせてきたし(笑)、下りコーナーは無敵だった。

そういえば、著名なレーシングメカニックとツーリングに出かけたときに、氏に言われたことを思い出す。

「スクーターって嫌いなんだよね。でも、一緒に走ったたら考えが変わった。TMAXだけは認めよう」

特に現行モデルは、CFアルミダイキャストフレームの新採用やフロントタイヤの15インチ化、ディメンションの見直しなどによって、一段とスポーツティカツ自然なハンドリングを身につけている。いつそ、バイクに近付いたわけだ。欧州市場で「年間3万台を超えるベリスで売れているヒット作」という話にも納得である。

もし、みんなさんが1台で「実用から趣味の走りまでこなしたい」「雨でも冬でも快適に走りたい」と考えているなら、TMAXは最高の相棒にならてくれるに違いない。